

他の領域と共に可能性を拡げられる運営機構

中村滋延

カールスルーエのZKMにおける創作活動

■音楽以外の芸術領域と

仕事ができる魅力

本誌二月号ですでに報告したように、私は昨年十一月中旬から本年二月末まで客員芸術家としてカールスルーエのZKM（芸術とメディア工学のためのセンター）で仕事をした。私が籍を置いたのはZKM内の音楽音響研究所であるが、仕事のテーマ（映像付きの電子音楽の制作）の関係上、画像メディア研究所においても作業することになった。このように他の芸術領域と関わり合って仕事ができるのが、ZKMの大きな魅力のひとつであり、特性なのである。へICMC（国際コンピュータ音楽会議）に参加する度にも思うことであるが、コンピュータなどの新しいメディアを使った音楽表現

は、音楽以外の芸術領域との結び付きをますます強くしつつある。そうした傾向をはっきり理解した上でZKMは設立・運営されているのである。

■制御システムも自身で創作する現場

ーブリュンマー、古川、ゲルヴィン etc.:

このZKMを創作の場としている作曲家の一人に、現在、電子音楽の分野においてその活動が最も注目されているドイツの作曲家ルドゥガー・ブリュンマー（Ludger Brünner）がいる。彼はアルス・エレクトロニカ賞のコンピュータ音楽部門第一位、へICMC97におけるICMA賞（国際コンピュータ音楽協会賞）などの受賞者である。彼もZKMの特性を利用して、他の芸術領域の作家との共同制作も手掛けている。例えばへICMC97

で初演された《Lizard Point》は映像作家ジルケ・ブレーマー（Silke Brähler）との共同制作である。また彼はダンサーとの共同制作も試みようとしており、ダンサーの動きと電子音響をコンピュータ上で結び付ける作品を計画中である。

同じくZKMを創作の場としている古川聖は、映像作家との共同作業、だけではなく、画像パートも自身で担当するマルチメディアアートの音楽作品も制作している（《Swim Swan》《Die Gabe des Lapislazuli》など）。特に彼の優れているところはライヴの音楽演奏によって画像パートを生成・制御するシステムそのものも自身で制作していることである。

古川とともにそのマルチメディア・オペラがZKM第五回ヘルムチメディアイレで初演された作曲家メシアス・マイ

グアシュカ (Mesias Maiguashca) は、美術分野と深く関わって、立体造形としての創作楽器メタールオブイェクテ (Metalobjekte) を用いたコンピュータ音楽をZKMで制作している (《The Tonal》《The Nagual》など)。

また、ZKMの資料館 (メディアアター



▲ZKM正面
◀音楽アトリエで作業中の筆者

ク)の音楽部門の主任である作曲家トマス・ゲルウィン (Thomas Gerwin) は自身の電子音楽をサウンドスケープとの関係でとらえている。ZKMのメディア美術館には彼の「音響世界地図 (KlangWeltkarte)」というサウンド・インスタレーションが設置されている。これは世界各地から集められたサウンドスケープを自由に選択し組み合わせて聴くことができる装置であり、壁面の大きな世界地図にサウンドスケープの場所が音と同

時に明示されるようになっていく。

■《sabi》—義太夫の標題音楽を象徴的に音と画像で

ZKMのこうした環境・雰囲気の中で私は映像付きの電子音楽、映像音響詩《sabi》を制作した。画像パートも私自身の制作によるもので、画像と音響の作品の中で比重は等しい。じつは私は五年前から視覚的要素の音楽構成への取り込みという視点から映像作品の制作に手を染めていた。ZKMがSWF (南西ドイツ放送) と共催する国際ビデオ・

アート賞にも私の映像音響詩《Yin & Yang》と《Epitaph》が二年連続 (九五

年および九六年) 入選しており、その関係でZKMの映像関係者からも映像作品の制作を期待されてもいた。

映像音響詩《sabi》は音響・画像パートともにマツキントツシュ・コンピュータを基本とする機材環境で制作した。

《sabi》は日本語の「わびさび」の「さび」という言葉から取ったタイトルである。義太夫を音の主素材とした電子音楽と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

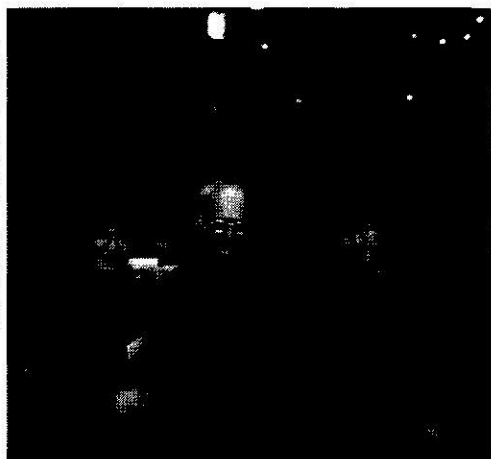
と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。

と、カールスルーエで生活する私自身の姿を抽象的形象に変調しそれを主素材にしたビデオ画像とによる作品である。



▶(右から) 古川氏、ゲール氏、筆者
▼ゲルウィン 《音楽世界地図》

この作品には三つの基本的なアイデアがあつて、最終的にはそれらがすべて取り入れられ、入れ子構造的に組み合わされている。その三つのアイデアのひとつめは、モチーフとなった義太夫《熊谷陣屋の段》の筋書きを要約した標題音楽を作ることであつた。二つめはその内容を象徴的かつ抽象的に音と画像で表現することであつた。三つめはこれらの制作時に、思考し・悩み・異国での生活でさまざまに物思いする作家としての「私」を音と



画像で描くことであつた。

この作品は、まず二月十日にZKM内で行われた私自身による私の作品についての講演の中で発表された。この講演は「聴覚と視覚の統合」というタイトルでドイツ語で行われた。この講演の中で私は、ミュージック・シアターから映像音響詩にいたる視覚的要素を伴う私自身の

これまでの音楽を分析しながら紹介し、その延長線上にある作品として《sach》について語り、それを提示した。その後、二月十六日に国立ハンブルク音楽大学で行われたIMECコンサートにおいても発表された。IMEC (International Mikrotonale, Elektronische und Computermusik) コンサートは国立ハンブルク音楽大学教授の作曲家マンフレット・シュターンケ (Manfred Stahnke) が主宰するコンサート・シリーズである (M・シュターンケについては本誌一月号に高野真理、三月号に松平頼暁の諸氏による紹介がある)。

■次々とCD、CD-ROM化される作品
ーゲール所長のもとで

なお、ZKMで制作された電子音楽のいくつかは、音楽音響研究所所長のヨハネス・ゲーベル (Johannes Geibel) のディレクションによってCD化され、現代音楽のための有名なCDレーベルのWargoから発売されている。また、マルチメディア的作品やライヴ・パフォーマンスを伴う作品は次々とCD-ROM化される予定である (一部はすでに発売されている)。なかむら しげのぶ 作曲家